アルフレッド・クローバーにおける「文化」と「文明」

――『人類学』1923 年版と 1948 年版を中心に ――

沼　崎　一　郎

は じ め に

本稿の課題は，アルフレッド・ルイス・クローバー（Alfred Louis Kroeber）の人類学的思想における「文化（culture）」概念と「文明（civilization）」概念の特色を明らかにすることである。そのため，特に彼の主著である『人類学（Anthropology）』1923 年版（以下，『初版』）と 1948 年版（以下，『改訂版』）とに注目する。『初版』は「長くにわたり，アメリカの多くの大学において，入門的な授業の代表的な教科書であった」（Steward 1962：214）[1]。これに対して，クローバーの退職後に出版された『改訂版』は 850 頁を超える大著であり，当時のアメリカ人類学を総合するとともに，クローバーの理論的な到達点を示すものである[2]。「それは，もはや代表的な入門的教科書ではない。しかし，一層重要なのは，それが博士候補生など上級読者に対して近代人類学の基本的な俯瞰図を提供するものだということである」（Steward 1962：214）。いずれにせよ，両書は 20 世紀前半のアメリカ人類学において重要な位置を占める著作であり，いわゆるボアズ学派の流れを辿るうえで無視できない存在である。

クローバーは，1876 年ニュージャージー州に生まれた[3]。両親ともプロテスタント系のドイツ移民である。母はアメリカ生まれだが，父は 10 歳の時に両親と共にアメリカに渡っている。家庭の言語はドイツ語であった。家族はニューヨークのドイツ人社会では中産階級上層に属し，知的なドイツ移民文化のなかでクローバーは成長した。1892 年，コロンビア大学に入学。専攻は英文学であった。この年，コロンビア大学講師に就任し

---

[1] 筆者の入手した古書には，謄写版刷りの試験問題が挟まれていた。

[2] 1963 年には，本書第 1 章および第 6 ～ 10 章を収録した縮約版が『人類学―文化の諸様式と諸過程』（Kroeber 1963b）と題してコロンビア大学出版会からペーパーバック版で出版されている。

[3] 以下の記述は，Steward（1962, 1973），Kroeber（1970），Jaknis（2002）に依拠している。クローバーの生涯について日本語で読めるものとしては，松園（1971）が簡便である。

たフランツ・ボアズの言語学演習に出席して人類学に興味を抱き，英文学で修士を取得した後，人類学に転向する。1899 年にボアズがコロンビア大学正教授に就任すると，その学生となり，1901 年にコロンビア大学初の人類学博士の学位を得た。同年，クローバーはカリフォルニア大学バークレー校の人類学科創設に加わり，以後，1946 年に退職するまで同校に在籍した。退職後も各所で講義を行い，著作も続けたが，1960 年にパリで死去している。

クローバーに注目する理由は二つある。一つは，彼が「最初のボアズ派（The first Boasian）」（Jaknis 2002）であることだ。フランツ・ボアズの文化概念が弟子たちによって如何に継承されたかを明らかにするためには，クローバーを無視することはできない，もう一つは，これが本稿の主題であるが，終生「文明」の研究にこだわり続けたことである。前稿（沼崎 2014）でも指摘したように，アメリカ人類学においては 1930 年代後半から文明という語の使用が減り，文化という語に置き換えられていく傾向が見られる。しかしながら，クローバーは文明という語を使い続けた。それは何故か，そしてその意義は何処にあるのか考えてみたい。

1 「超有機的」と「文明秩序の原理」

クローバーの最初の重要な理論的著作は，1917 年に発表された長大な論文「超有機的（The Superorganic）」（Kroeber 1917）である。

この論文でクローバーは，「生命的なものを社会的なものから（the *vital* from the *social*）」すなわち「有機的なものを文化的なものから（the *organic* from the *cultural*）」（Kroeber 1917 : 163，強調は原文）峻別し，生命的で有機的な生物の進化と，社会的で文化的な文明の進歩とでは，その原理が根本的に異なることを認識すべきであると主張して，通俗的な社会ダーウィニズムや優生学の生物学的還元主義を鋭く批判した。クローバーは言う：

> In short, organic evolution is essentially and inevitably connected with hereditary processes ; the social evolution which characterizes the progress of civilization, on the other hand, is not, or not necessarily, tied up with hereditary agencies（Kroeber 1917 : 167）.

> It has already been shown that if there is anything that heredity does not do, it is to accumulate. If, on the other hand, there is any one method by which civilization may be defined as operating, it is precisely that of accumulation（Kroeber 1917 : 186）.

遺伝的変異に依存する生物進化のプロセスにおいては，獲得形質は継承されない[4]。しかし，遺伝的変異に依存しない社会進化のプロセスでは，新しく獲得された文化は，学習によって，世代を越えて，また地域や民族を越えて継承され，蓄積されていく。それゆえ，文明の進歩は，有機的な段階を超越した独自の段階の現象なのだとクローバーは主張するわけである[5]。

---

[4] Kroeber（1916a）は，この点を強調する論文であり，Kroeber（1917）の予備的考察と言える。Kroeber（1916a）に対してはゴールデンワイザーがコメントを寄せ，獲得形質の遺伝に関する議論の決着は生物学に委ねるべきではないかと批評しつつ，「あまりにも頻繁に見られる有機的生と超有機的生の混同（all too frequent confounding of organic with superorganic life）」（Goldenweiser 1916 : 292）に対するクローバーの明快な批判を賞賛し，「生物学と歴史学のアプローチの間，形質の遺伝と文明の蓄積過程の間の根深い亀裂（the deep-rooted disparity between the biological and the historical approach, between physical heredity and the cumulative processes of civilization）」（Goldenweiser 1916 : 293）の存在をクローバーが強調した点を評価している。そして，このコメントに対する応答において，クローバーは「まさに問題の核心は，超有機的と呼べる何物かが存在するか否かという問いに存する（The crux of the whole matter lies in the question whether or not there is anything superorganic）」（Kroeber 1916b : 295）と述べている。したがって，「超有機的」という表現を最初に用いたのはゴールデンワイザーであり，ゴールデンワイザーとの誌上質疑に触発されて，クローバーは「超有機的」と題する論文を改めて執筆したものと思われるのである。なお，「超有機的」はハーバート・スペンサーの造語と言われる（Kroeber 1959 : 398 ; 松園 1971 : 283）。

[5] 不思議なことに，論文題名の「超有機的」という表現は本文中では使われておらず，有機的に対立する語としては社会的ないし文化的が使われている。しかしながら，前年のゴールデンワイザーのコメントに対する応答の末尾で，クローバーは，あらゆる機会に文明の「超有機的」性格を主張すべきだと極めて強い語調で述べている（Kroeber 1916b : 296）:

> If there is nothing beyond the organic, let us quit our false and vain business and turn biologists, and encourage the world to reason and interpret only in organic terms. But if there is a superorganic phase, it behooves us not merely to rest supine within our knowledge, but to press this great truth at every opening and every turn, to brand each error and confusion as fast as it raises its head, to stigmatize all half-hearted evasion, to meet argument with argument and, if necessary, assumption and assertion with counter assumption and assertion, to fight candor with candor so far as may be in us, reasoning with reason, presumption with a challenge ; to stir stupidity unceasingly, harass cowardice without mercy, and encounter prejudice with every weapon and on every condition of its own choosing ; until the time shall come when there will no longer be question of the proportion of the initiated, but a true democracy of the intellect shall prevail in which there are no more uninitiated or outcast, in these matters at least : when we shall be able to push on to the next of the problems that lie before us in infinite series.

クローバーの論文「超有機的」（Kroeber 1917）は，非常な意気込みで書かれたものと言えよう。

さらに，クローバーは，「社会的ないし文化的なもの（The social or cultural）」は「その本質において非個人的（in its very essence non-individual）」であり，「それ自体としての文明は，個人が尽きるところにのみ始まる（Civilization, as such, begins only where the individual ends）」と主張する（Kroeber 1917 : 192-193）。すなわち，文明は個人を超えた何かであって，心理学的に還元することはできないというのである。そして，文明の進歩における個人の役割，特に天才の貢献の重要性を否定する。発明や発見は文明が一定の段階に達していれば起こるべくして起こるのであって，社会的ないし文化的レベルで見れば，文明の生みの親は文明そのものだというのである（Kroeber 1917 : 195-201）。そして，次のように結論する（Kroeber 1917 : 212）:

> The mind and the body are but facets of the same organic material or activity ; the social substance—or unsubstantial fabric, if one prefers the phrase, —the existence that we call civilization, transcends them utterly for all its being forever rooted in life.

文明の担い手は生身の人間であるが，文明は生身の人間を超えた存在であり，その発展過程は，社会的ないし文化的レベルにおいて，歴史学的に辿るしかないのである（Kroeber 1917 : 212-213）。

このような文明観に基づくクローバーの実証的な研究が，1919 年の論文「ファッションの変化に例示された文明秩序の原理について」（Kroeber 1919）である。この論文でクローバーは，女性の衣服の形態がどのように変化するか計量的な研究を行い，スカートの幅には，一旦広がり始めると広がり続け，ある長さに達すると今度は狭まり始め，ある長さまで狭まると再び広がり始めるという変化の繰り返しが見られ，その周期はおよそ 100 年であるが，スカート丈の長短の変動周期はおよそ 30 年，さらにウエストラインの変動周期は 75 年，そして襟ぐりの開き具合の変動周期は一世紀半といった計測結果を得ている（Kroeber 1919 : 257-258）[6]。クローバーは，このような長期的に一貫した変動は，個人の好みやデザイナーの才能を超えたものであって，「個人の恣意性ではなく，文明決定論で説明される（the principle of civilizational determinism scores against individualistic randomness）」のであり，ファッションに限らず「社会的な出来事の方向

[6] 後年，クローバーは，データの収集範囲を 3 世紀に拡張して再検証を行い，女性の衣服の形態が長期的で規則的な変動パターンを示すことを再確認している（Richardson and Kroeber 1940）。

性を決定する超個人的な諸原理が働いている（there operate super-individual principles which determine the course of social events）」と考えるべきだと主張する（Kroeber 1919 : 261）。そして次のように断言する：

> In short, monotheism arises, an iron technique is discovered, institutions change, or dresses become full at a given period and place—subsequent to other cultural events and as the result of them, in other words—because they must（Kroeber 1919 : 262）.

> The superorganic or superpsychic or super-individual that we call civilization appears to have an existence, an order, and a causality as objective and as determinable as those of the subpsychic or inorganic（Kroeber 1919 : 263）.

まさに文明は変わるべくして変わるのであって，文明は「超有機的，超心理的，超個人的」な存在であり，その秩序とそこに働く因果関係は，自然科学が解明した法則と同様に客観的に決定できるというのである。

これら二つの論文において，クローバーは文明の自律性を理論的かつ実証的に主張した。生物学的決定論を排除する点に異論は出なかったが，個人の役割を極小化する点と「超有機的」というレベルを設定する点に対してはエドワード・サピアから痛烈な批判が寄せられた（Sapir 1917）[7]。クローバーの意図は，文明の自律性を強調することで，草創期にあったアメリカ人類学が他の学問とは異なる独自の研究領域を有することを示すことにあったのだと思われる[8]。その目的がより明確になるのが，次に検討する『初版』である。

---

[7] クローバーの「超有機的」文明論は，文化を物象化するという批判も受けている（Krober and Kluckhohn 1963［1952］: 291）。後年，クローバーは物象化と取れる表現を撤回すると述べている（Kroeber 1952 : 23）。

[8] クローバー自身は，当時を振返って，一般社会に流布する俗流社会進化論に対抗することが主な目的だったと述べている（Kroeber 1952 : 22）。また，第一次世界大戦のさなか，プロパガンダ用語と認識されていたドイツ語の “Kultur” と混同されることを恐れて，culture ではなく civilization を用いたとも述べている（Kroeber and Kluckhohn 1963［1952］: 52-53）。

Ⅱ 『初版』における「文化」と「文明」

前稿（沼崎 2014）で述べたように，1920 年代になるとボアズの弟子たちを中心に人類学の教科書が次々と出版される（Goldenweiser 1922 ; Kroeber 1923 ; Wallis 1926 ; Wissler 1923, 1929）。しかしながら，大学の人類学教育において入門的な教本として最も広く長く使われたのは，クローバーの著書であった。『初版』の目次は，以下の通りである。

I. The Scope and Character of Anthropology
II. Fossil Man
III. Living Races
IV. Problems of Race
V. Language
VI. The Beginnings of Human Civilization
VII. Heredity, Climate, and Civilization
VIII. Diffusion
IX. Parallels
X. The Arch and the Week
XI. The Spread of the Alphabet
XII. The Growth of a Primitive Religion
XIII. The History of Civilization in Native America
XIV. The Growth of Civilization : Old World Prehistory and Archaeology
XV. The Growth of Civilization : Old World History and Ethnology

章立ては，いかにも「最初のボアズ派」らしく，人種に始まり，言語を挟み，文化に進むという形を取っている。しかし，最も目を惹くのは，多くの章題に文化ではなく文明という語が使われていることである[9]。それも，単数形の文明だ。本書の関心が人類文明全体の歴史的発展にあることは，目次を一瞥するだけで明らかであろう。

[9] 本書の前年に出版されたゴールデンワイザーの教科書は書名に文明を含む（Goldenweiser 1922）。同書の中心概念は文明であったが，同書の改訂版として 1937 年に出版された新しい教科書では文化が中心に据えられている。詳しくは沼崎（2014 : 94-95）を参照されたい。

クローバーによれば，人類学は「人間とその所産の科学（the science of man and his works）」（Kroeber 1923：1）である。すなわち，人間精神（human mind）の産物と人間身体（human body）とが人類学の研究対象となるのだが，前者は政治史，経済学，文芸批評，芸術史の対象であるし，後者は生物学や医学の対象であり，人類学は余計な代物のように見えるとクローバーは述べる（Kroeber 1923：1-2）。それでは人類学の独自性は何処にあるかというと，「有機的なもの（the organic）」と「社会的なもの（the social）」が相互浸透する領域の研究である（Kroeber 1923：2）。クローバーは次のように述べる（Kroeber 1923：4）：

> To deal with this interplay of what is natural and nurtural, organic and social, anthropology must know something of the organic, as such, and of the social, as such. It must be able to recognize them with surety before it endeavors to analyze and resynthesize them.　It must therefore effect close contact with the organic and the social sciences respectively, with “biology” and “history,” and derive all possible aid from their contributions to knowledge.

人類学は，有機的なものと社会的なものとを峻別しつつ，両者の相互浸透を研究する学問であり，生物学と歴史学を架橋するとクローバーは言う。1920 年代初頭，アメリカ人類学は草創期にあり，その学問的位置づけは確定していなかった。クローバーは，教科書の冒頭で，人類学の位置づけを明確化する必要があったのである。

人類学において，生物学により近い分野は形質人類学（physical anthropology）と呼ばれ（Kroeber 1923：4-5），歴史学により近い分野は文化人類学（cultural anthropology）と呼ばれる（Kroeber 1923：5-6）。両分野を統合して初めて本当の人類学になるはずなのだが，クローバーの主要な関心が文化人類学にあることは，本書 15 章のうち後半 10 章がこの分野に充てられている事実が明白に示している。以下，クローバーの「文化人類学」に焦点を合わせて，彼の文化観・文明観を検討してみよう。

1.　文化人類学

クローバーによると，文化人類学は「歴史学の知見を一般化すること（to generalize the findings of history）」（Kroeber 1923：5）を関心事とする。すなわち，歴史学の成果

である「個別史」と民族学の成果である「民族誌」とを総合して人類の「一般史」を再構成することが，文化人類学の第一の課題となるわけである。そして，「社会人類学または文化人類学（social or cultural anthropology）」は，「望むらくは，抽象的に，あるいは一般化された諸原理の形で，時と場所を問わず，全ての諸文明をよりよく理解すること（understand better all civilizations, irrespective of time and place, in the abstract or in form of generalized principle if possible）」を目標に，西洋に限らず「古代の諸民族も，野蛮な諸民族も，珍奇な諸民族も，滅亡した諸民族も（ancient and savage and exotic and extinct peoples）」漏らさず研究対象とする（Kroeber 1923：6）。なぜなら，「人間の社会生活すなわち文明の形成に寄与する諸原理を知りたいと欲するなら，フランスと同等に中国も重要であり，身近な現在と同等に遠い過去も重要だからである（if we wish to know the principles that go into the shaping of human social life or civilization, China counts for as much as France, and the ancient past for as much as nearby present）」（Kroeber 1923：6）。

ここで，クローバーが文明（civilization）ならびに諸文明（civilizations）という表現を用いていることに注目したい。別稿（沼崎 2014：88-102）で指摘したことであるが，1910 年代から 1920 年代にかけて，アメリカ人類学では文化という語と文明という語が混用されていた。しかし，クローバーは，文化人類学の研究対象の定義において，文明という語を採用しているのである。1917 年の「超有機的」論文（Kroeber 1917）を継承していると考えてよいだろう[10]。

そして，全ての文明に通底する「一般的な諸原理」の探求が文化人類学の目標として掲げられていることも重要である。「諸原理」の探求は，前節で検討した 1919 年の「文明の秩序原理」論文でも主要な関心事であった。「歴史学の知見を一般化すること」によって，そこに通底する「諸原理」を明らかにし，人類学は「人間とその所産の科学」になるというわけである。

次に，節の見出しが文化人類学（Cultural Anthropology）であるのに，本文中では「社会人類学または文化人類学（social or cultural anthropology）」と表記されている点にも注目したい。「社会的（social）」と「文化的（cultural）」は互換可能なのであろうか。この点については，後に検討する。

[10] しかし，『初版』においては「超有機的」という表現自体は使われていない。

最後に，文明の複数性と対等性が主張されている点に注目したい。「人間の社会生活すなわち文明（human social life or civilization）」という表現が示すように，社会生活という営みは総じて文明なのであって，その営み方の普遍的な原理を探るうえでは「古代の諸民族も，野蛮な諸民族も，珍奇な諸民族も，滅亡した諸民族も」全て研究対象として対等の価値を有するというわけである[11]。

2.　文明観

『初版』におけるクローバーの文明観を端的に表しているのは，第 VI 章「人類文明の諸起源（The Beginnings of Human Civilization）」末尾の次の文章である（Kroeber 1923 : 177-179，強調は引用者）:

> The end of the Palaeolithic thus sees man in possession of a number of mechanical arts which enable him to produce a considerable variety of tools in several materials : sees him controlling fire ; cooking food ; wearing clothes, and living in definite habitations ; probably possessing some sort of social groupings, order, and ideas of law and justice ; clearly under the influence of some kind of religion ; highly advanced in the plastic arts ; and presumably already narrating legends and singing songs.　In short, many *fundamental elements of civilization* were established.

すなわち，旧石器時代の末期には，人類は，道具，衣類，調理，住居，社会集団，社会秩序，法と正義，宗教，芸術，伝承，歌謡といった「文明の基本要素」を生み出していたというのである。この解釈の妥当性は，ここでは問わない。ここで注目したいのは，クローバーが，文明の基本的要素として，物質文化から，社会と政治，宗教と芸術まで羅列しているという事実である。このような網羅的な文明概念は，まさにタイラー的であると言ってよいだろう。

『初版』の第 VIII～XV 章（Kroeber 1923 : 194-506）は，これら文明の基本要素がどのように発達し，どのような新たな要素が加えられてきたかを新旧両大陸に渡って追跡

[11] これは，いわゆる文化相対主義ではないだろう。西洋文明だけが普遍性を体現しているわけではないという意味では相対主義的であるが，クローバーの力点は，あらゆる時代のあらゆる民族が人類文明の総体的な発展に寄与しているという所に置かれているからである。

して，人類文明の蓄積過程を俯瞰するものとなっている。しかも，個別民族の個別文化ではなく，様々な「文化要素（culture element）」の発明や伝播，受容と拒否の歴史を，地理的分布を主な手がかりに，地域毎に再構成していくという叙述は，伝播主義的な文化史と言ってよいものだ。

このような叙述法をクローバーが採用した理由は二つあると思われる。一つは文化人類学の学問的な性格であり，もう一つは文明の発展が示す一般的な傾向である。

クローバーによれば，本質的に歴史学的な性格を持つ文化人類学は，「物事がいつどのように起こるのか，出来事がどのように経験されるのかに（with things as and how and when they happen, with events as they appear in experience）」関心を向ける（Kroeber 1923 : 325）。すなわち，具体的で個別的な歴史の再構成から出発する。

また，文化人類学の研究対象である文明の発展には，次のような傾向が見られる（Kroeber 1923 : 326-327，強調は引用者）：

> . . . *civilization is to a great extent the result of accretio*n.　New elements are handed down in time or passed along in space by a process which psychologically is one of imitation and in its cultural manifestations is spoken of as tradition or diffusion . . . in the domains of mechanical, institutional, and intellectual activity.

文明は，既存の文化要素に新しい文化要素が「付着（accretion）」することによって成長していく。模倣という心理学的な過程の一種である学習によって，新しい文化要素が時と場所を越えて伝えられる。それは，文化の次元で見れば，伝統あるいは伝播と呼ばれる過程である。

それゆえ，クローバーは様々な文化要素の継承と伝播が「いつどのように起こるのか」を，新旧両大陸を視野に入れて，人類の始原から近代に至るまで，再構成してみせるのである。それが，クローバー流の文化人類学ということになる。

しかし，常に新しい文化要素が「付着」するとは限らない。従来の文化要素が「慣性（inertia）」によって維持され続けることもある（Kroeber 1923 : 183, 292）。また，「付着」を妨げるものとして次のような要因もある（Kroeber 1923 : 292）：

> This is the tendency of culture elements which have for some time been associated,

> often only by accident, to form an interlocked aggregation or “complex.” Once such a complex or cluster has acquired a certain coherence, it survives with a tenacity independent of the degree of inherent or logical connection between its elements.

必然的であれ偶然的であれ，様々な文化要素が関連づけられ，「複合（complex）」が形成され，しばらく維持されると，容易に分解されないというわけである。そのような「複合」の例として，クローバーは，漢字が宗教や文学だけでなく社会制度とも密接に結合した「中華複合（the Chinese complex）」，キリスト教と聖職者の襟，科学と映画，工場労働と民主主義，洗練と粗野が結合した「西洋文明として知られる『複合』（the “complex” we know as Western civilization）」に言及している（Kroeber : 292）。

そうすると，複数形で語られる諸文明は，それぞれ固有の「複合」ということになる。しかし，ここで「複合」形成の偶発性をクローバーが強調していることに留意すべきであろう[12]。クローバーが個別文明を個々に描写するのではなく，文化要素の民族や地域を越えた普及の過程を描き，人類文明の総体的発展を俯瞰しようとするのは，個別文明を偶発的な「複合」としか見ないからであろう。この点で，クローバーの文明観はヘルダーとは対照的である。

個々の文明は，停滞もすれば衰退もする。しかし，人類史を俯瞰すれば，文明は総体的に前進し，進歩している。その全体像を素描したのが『初版』であった。

3.　文明と文化の関係

『初版』を一読すると，クローバーは文化と文明という語をほぼ同義に，互換的に使用しているように見える。たとえば，次の文章は典型的である（Kroeber 1923 : 137-8, 強調は引用者）：

> When a human or prehumen hand has made any article, one can judge from that article what its purpose is likely to have been, how it was used, how much intelligence that use

[12] ゴールデンワイザーは個別の文明を「連続体（continuum）」と呼び，それは「有機的に結びついた単位（an organic unit）」として研究しなければならないと述べている（Goldenweiser 1922 : 31）。対照的に，ロバート・ローウィは，文明とは「無計画なごたまぜ，つぎはぎ細工（that planless hodgepodge, that thing of shreds and patches）」であるとまで呼んでいる（Lowie 1920 : 441）。クローバーの立場は，ゴールデンワイザーとローウィの中間に位置すると見られる。

> involved, what degree of skill was necessary to manufacture the article.　All such artifacts—tools, weapons, or anything constructed—are a reflection of the degree of "culture" *or civilization*, elementary or advanced, possessed by the beings who made them.

あらゆる人造物は，「『文化』すなわち文明（"culture" or civilization）」の「発達程度（degree）」を反映しているとクローバーは言う。ここでは，人造物の用途や使用法，その用途や使用法を考案した知性，そして製作に必要な技術の練度などが，文化すなわち文明の内容物ということになろうか。

中華文明（Chinese civilization）と中華文化（Chinese culture）が互換的に使われている箇所もあるし（Kroeber 1923 : 215），エジプト文明（Egyptian civilization）（Kroeber 1923 : 443, 446）とエジプト文化（Egyptian culture）（Kroeber 1923 : 449）も同義的に使われている。

しかしながら，クローバーにとって，文化とは，何よりも文明の理論的な説明要因である。「文明の解釈において主要な要因と考えるべきは文化的または社会的要因である（the factors to be primarily considered *in the interpretation of civilization* are cultural or social ones）」（Kroeber 1923 : 326，強調は引用者）。「最初のボアズ派」の面目躍如たる主張である。そしてクローバーは，ボアズとともに，文化決定論の立場から，反人種決定論，反環境決定論を表明する。

クローバーは，先ず，文明は遺伝（heredity）ないし人種（race）では説明できないと主張する。

> . . . in every particular case it is difficult or impossible to establish by incontrovertible evidence that heredity is the specific cause of this accomplishment, of this point of view, or of this mode of life ; that it is the determining factor to such and such degree of such and such customs（Kroeber 1923 : 180）.

> The problem of connecting specific race traits with specific phenomena of culture or group conduct, such as settled life, architecture in stone, religious symbolism, and the like, —of determining how much of this type of architecture or symbolism is instinctive in the race and how much of it is the result of traditional or social influences, —remains

unresolved (Kroeber 1923 : 181).

「特定の達成（this accomplishment)」や「特定の視点（this point of view)」や「特定の生活様式（this mode of life)」を遺伝的要因に還元することはできないのであり，「特定の文化的諸現象すなわち集団行動（specific phenomena of culture or group conduct)」を人種的特性に還元することもできない。

さらに，「明らかに，自然環境は人間生活に制約条件を課すが，同様に明らかに，発明や制度の原因ではない（Obviously, natural environment does impose certain *limiting conditions* on human life ; but equally obviously, it does not *cause* inventions or institutions)」(Kroeber 1923 : 182，強調は原文）と述べ，次のように結論する。

> In general, then, it may be concluded that the directly determining factors of cultural phenomena are not nature which gives or withholds materials, but the general state of knowledge and technology of the group ; in short, historical or cultural influences (Kroeber 1923 : 182).

> . . . it is clear that cultural factors ordinarily interpret more phenomena of civilization, and interpret them more fully, than factors either of racial heredity or physical environment (Kroeber 1923 : 186).

> It is not that heredity and natural environment fail to apply to man, but that they apply only indirectly and remotely to his civilization (Kroeber 1923 : 186).

> When, however, the explanation can be made in terms of culture—always of course on the basis of a sufficient knowledge and digestion of facts—it applies increasingly to the whole of civilization, and each portion explained helps to explain better all other portions (Kroeber 1923 : 192).

上記の一連の引用は，クローバーが文明の説明は文化的要因（cultural factors）に依らなければならないと主張していることを示すと同時に，クローバーが文化的要因の内容

をどう考えているかも示している。それは，「当該集団の一般的な知識と技術のレベル（the general state of knowledge and technology of the group）」である。クローバーは文化を「人間の思考と行動（human thought and action）」（Kroeber 1923 : 192）と言い換えてもいるが，クローバーにとって文化とは人間の能力とその発露であって，力点は能力のほうに置かれていると言ってよい。一方，文明は「人類の労働の総体と段階的な達成（the whole of the labors and gradual achievments of humanity）」（Kroeber 1923 : 506）であり，どちらかと言えば「人間の所産」である。

4.　まとめ

1923 年時点のクローバーにとって，文明とは，「無機的なもの」である自然環境および「有機的なもの」である人種や遺伝に還元できない「文化的なもの」であり，それは伝統と伝播という「社会的な」過程を経て継承蓄積される「人間の所産」なのである。そして，それは，1917 年論文の表現を使えば「超有機的なもの」であり，1919 年論文の表現を使えば「文明秩序の原理」に従って変化するものである。

次節では，このようなクローバーの文化観・文明観が 1948 年時点ではどのように変わっているのかいないのか，検討を加えることとしたい。

Ⅲ　『改訂版』における「文化」と「文明」

カリフォルニア大学退職から 2 年後の 1948 年に出版された『改訂版』の目次は以下の通りである。

Chapter One : What Anthropology Is about
Chapter Two : Man’s Place in Nature
Chapter Three : Fossil Man
Chapter Four : Living Races
Chapter Five : Problems of Race Difference
Chapter Six : Language
Chapter Seven : The Nature of Culture
Chapter Eight : Patterns

Chapter Nine : Culture Processes
Chapter Ten : Culture Change
Chapter Eleven : Some Histories of Inventions : The Interplay of Factors
Chapter Twelve : Cultural Growth and Spreads
Chapter Thirteen : Story of the Alphabet
Chapter Fourteen : Distributions
Chapter Fifteen : Cultural Psychology
Chapter Sixteen : The Beginnings of Human Civilization
Chapter Seventeen : Later Prehistory and Ethnology in the Old World
Chapter Eighteen : American Prehistory and Ethnology
Chapter Nineteen : Retrospect and Prospect

全体で 19 章，本文 850 頁の大著である。『初版』にはなかった「人種・言語・文化・心理学・先史学（Race・Language・Culture・Psychology・Prehistory）」という副題が付けられている。第 1 章は，『初版』第 I 章を踏襲しているが，章題が変わり，新しい節が二つ追加されている。第 2 章は新しく，第 3〜6 章が『初版』の第 II〜V 章に対応するが，内容は刷新されている。第 7〜11 章は，ほぼ全面的に新しく書き加えられた文化論であり，『改訂版』の中核をなす。第 15 章，第 19 章も新しい。第 12〜14，16〜18 章は，『初版』の後半部に対応する部分もあるが，大きく改訂されている。クローバーによると，『初版』の第 VII 章は「跡形もなく消えている」（Kroeber 1948 : 852）。

先ず目につくのは，多くの章題で文明ではなく文化が使われていることであるが，文明という語は『初版』第 VI 章と同じ章題を持つ第 16 章に残っている。それでは，クローバーの人類学観と文化観・文明観の変化を検証していこう。

1.　人類学観

『改訂版』では，人類学は「人間とその所産および行動の科学（the science of man and his works and behavior）」であると述べられ，さらに「人間の諸集団とその行動および諸産物の科学（the science of groups of men and their behavior and productions）」と説明される（Kroeber 1948 : 1）。「行動（behavior）」が加えられている点が新しい。これは，第 15 章「文化心理学」が加えられたためと思われる。そして，「人類学に特有の課題の

一つ（one distinctive task for anthropology）」は「先天的な有機的要因と『社会的』すなわち後天的に獲得された要因の両者が共に関与する又は関与しうる諸現象の解釈（the interpretation of those phenomena into which both innate organic factors and “social” or acquired factors enter or may enter）」だと主張される（Kroeber 1948：3）。「社会的」が引用符に囲まれているのは，後に社会と文化の差別化に言及されるからである。後に区別される社会的と文化的という意味の両方を含む場合は，「社会文化的（sociocultural）」と表記することが表明され（Kroeber 1948：3）[13]，『初版』では単に「文化人類学」と題された節は「社会文化人類学（Sociocultural Anthropology）」と改題されている。しかし，この節の内容はほとんど変更されておらず，社会文化人類学が「歴史学の知見を一般化」し，「望むらくは，抽象的に，あるいは一般化された諸原理の形で，時と場所を問わず，全ての諸文明をよりよく理解する」ために，「古代の諸民族も，野蛮な諸民族も，珍奇な諸民族も，滅亡した諸民族も」漏らさず研究対象とするという説明に変更はない（Kroeber 1948：4）。したがって，クローバーの人類学観は『初版』から変わっていないと判断できる。

新たに追加された「社会と文化（Society and Culture）」と題する節では，社会と文化が次のように対比される。「社会（society）」または「社会的（social）」という語は，「諸個人から成る諸団体（associations of individuals）」または「集団的諸関係（group relations）」を指す（Kroeber 1948：7）。これに対して，文化（culture）は「学習され伝承された運動反応，習癖，技能，理念および価値―ならびにそれらが誘発する行動―の集合（the mass of learned and transmitted motor reactions, habits, techniques, ideas, and values—and the behavior they induce）」である（Kroeber 1948：8）。そして，文化は「社会的人間の産物の総体であると同時に，あらゆる人間に対して社会的にも個人的にも巨大な影響を及ぼす力（the totality of products of social men, and a tremendous force affecting all human beings, socially and individually）」であり[14]，それゆえ「文化は人類に普遍的であ

[13] 「社会文化的」とは「有機的なものにプラスされる何か（“organic-plus”）」または生物学的個人を超えた「有機的より上（more-than-organic）」の諸現象を指すと説明されている（Kroeber 1948：7）。すると，先の引用符付きの「社会的」とは，実は「社会文化的」という意味で用いられているわけである。

[14] この社会と文化の区別は，アメリカにおける社会学と人類学の縄張りを明確化するために行われた感がある。後に，クローバーは，タルコット・パーソンズと共著で 1958 年に「文化と社会システムの概念」という小文を *American Sociological Review* 誌の “The Profession：Reports and Opinion” 欄に掲載し，次のような区分を提案している（Kroeber and Parsons 1958：583，強調は原文）：

る（culture is universal for man）」（Kroeber 1948：9）。

ここでクローバーは，タイラー以来，「『文明』と『文化』という語は，しばしば同じものを指す語として，それも常に同じものの程度を指す語として使われている（the words “civilization” and “culture” are often used to denote the same thing；and always they denote the degrees of the same thing）」と注釈を付ける（Kroeber 1948：9）。後に詳述するように，『改訂版』においても文明と文化は同義的で互換的に使われていることは，注目に値する。

同じく新たに追加された「人類学と社会諸科学（Anthropology and the Social Sciences）」と題する節では，人類学の特徴が次のように表明される（Kroeber 1948：11）：

> Of all the social sciences, anthropology is perhaps the most distinctively culture-conscious. It aims to investigate human culture as such：at all times, everywhere, in all its parts and aspects and workings. It looks for generalized findings as to how culture operates—literally, how human beings behave under given cultural conditions—and for the major developments of the history of culture.

人類学は「人間文化を丸ごと研究（investigate human culture as such）」するという点が重要である。他の社会諸科学は，文化を部分的に取り上げるだけだからである（Kroeber 1948：12）。ここで，「いかに文化が働くか（how culture operates）」に加えて，「文化史の主要な展開（the major developments of the history of culture）」をも人類学の研究目的に掲げているところに，クローバーらしさが表れていると言えようか。

『初版』では人類学を生物学と歴史学の間に位置づけるだけでよかったのに比して，『改訂版』では社会学や心理学など他の社会諸科学との差異化を図らなければならなくなったところに時代の変化が見て取れる。

> We suggest that it is useful to define the concept *culture* for most usages more narrowly than has been generally the case in the American anthropological tradition, restricting its reference to transmitted and created content and patterns of values, ideas, and other symbolic-meaningful systems as factors in the shaping of human behavior and the artifacts produced through behavior. On the other hand, we suggest that the term *society*—or more generally, *social system*—be used to designate the specifically relational system of interaction among individuals and collectivities.

この区別は，1948 年に『改訂版』でクローバーが提起した区別にほぼ合致するものとなっている。

2. 文化観

「文化とは何かを理解するには，それがどのような形態を取り，どのように働くかを知ることのほうが，定義を下すことよりも有益である（What culture is can be better understood from knowledge of what forms it takes and how it works than by a definition）」とクローバーは言う（Kroeber 1948 : 252）。しかしながら，いくつかの定義を吟味することも悪くないと，彼が取り上げるのは古典的なタイラーの定義，リントンの「社会的遺伝（social heredity）」，そしてローウィの「社会的伝統の総体（the whole of social tradition）」である（Kroeber 1948 : 252-253）[15]。これらの定義は，「如何に持たれるに至るか（*how it comes to be*）」という過程によって文化を特徴付けるという共通点があるとクローバーは述べる（Kroeber 1948 : 253，強調は原文）。

次にクローバーが強調するのは「文化が超個人的であると同時に超有機的である（culture is both superindividual and superorganic）」という点である（Kroeber 1948 : 253）。これは，彼が1910年代から一貫して主張していることだ。しかしながら，1917年の論文「超有機的」への批判を受けて，次のように補足する：

> “Superorganic” does not mean nonorganic, or free of organic influence and causation ; nor does it mean that culture is an entity independent of organic life in the sense that some theologians might assert that there is a soul which is or can become independent of the living body（Kroeber 1948 : 253）.

> . . . there are certain properties of culture—such as transmissibility, high variability, cumulativeness, value standards, influence on individuals—which is difficult to explain, or to see much significance in, strictly in terms of the organic composition of personalities or individuals.　These properties or qualities of culture evidently attach not to the organic individual as man as such, but to the actions and behavior products of societies of men—that is, to culture（Kroeber 1948 : 254）.

[15] タイラーの定義は，もちろん1871年の『未開文化』の冒頭に掲げられたものである（Tylor 2010［1871］: 1）。リントンの定義は，1936年の『人間の研究』（Linton 1936 : 76-78）に表明されており，「習癖（habits）」の継承を意味する。ローウィの定義は，1934年の『文化人類学入門』（Lowie 1934 : 3）に表れ，タイラーの言う「社会の成員として後天的に獲得された能力と習癖」を含むものである。どちらも，生物学的遺伝や先天的な本能と対比される。

> The mass or body of culture, the institutions and practices and ideas constituting it, have a persistence and can be conceived as going on their slowly changing way “above” or outside the societies that support them. They are “above” them in that a particular culture, a particular set of institutions, can pass to other societies ; also in that the culture continuously influences or conditions the members of the underlying society or societies—indeed largely determines the content of their lives（Kroeber 1948 : 254）.

文化は，個人ではなく，社会に属する。文化は，担い手である個人が死んでも消滅せず，個人の人生より長く持続する。また，文化は一つの社会から他の社会へと伝授される。そういう意味で，文化は社会の「上に浮いて（above）」いるとクローバーは言うのである。「超有機的」あるいは「文明秩序の原理」よりは慎重な物言いになっているとはいえ，「超個人的」および「超有機的」という表現を使い続けていることは，1948 年の文化観が 1910 年代の文明観を継承したものであることを明確に示していると言えよう。

さらに，クローバーは文化の「開放性（openness）」と「受容性（receptivity）」が文化の「混成性（compositeness）」を生み，伝播と同化のプロセスが「文化的雑種性（cultural hybridity）」をもたらし，その結果として人類文化の総体は「連続体（continuum）」を成すと論じる（Kroeber 1948 : 256-265）。そして，それゆえに文化と文明は同義的で互換的なのだと主張する（Kroeber 1948 : 261）:

> . . . culture is a far more closely and frequently interconnected continuum, in space and time as we as in developmental relations.
>
> Perhaps this is why we have only the one word “culture,” or its equivalent, “civilization,” for its broadest as well as its narrowest exemplifications. We use the same term for the totality of human culture considered philosophically, and for the specific and distinctive culture of a little tribe of a hundred souls.

人類全体の文化すなわち文明と，個々の民族あるいは社会に独自の文化すなわち文明とは，その密接で複雑な連関ゆえに，不可分なのである。

しかしながら，「個々の独自文化には，必然的かつ自動的に，特定の社会が対応する（To each distinctive culture corresponds, necessarily and automatically, a particular society）」

（Kroeber 1948 : 267）。そして，様々な外来要素を取り入れた混成でありながら，個々の文化は「緊密で統合されたものと常に感じられ，『正しい』ものとして受容される（regularly felt as something coherent and integrated, and normally accepted as “right”）」（Kroeber 1948 : 286）。ただし，文化的統合は，生命体の有機的統合ほど強くはない（Kroeber 1948 : 287）。

このように，『改訂版』においてクローバーは，人類文化の一体性とともに，個別文化の独自性と統合性を承認しており，ボアズ的な文化観（沼崎 2013, 2014）を保持しつつ，ストッキングの言う人類学的文化概念（Stocking 1968［1966］）へも接近しているのである。しかしながら，クローバーの主な関心は人類全体の文化史にあると見なしてよい（Kroeber 1948 : 838-839）。この点は『初版』と変わらない。

最後に，『改訂版』においてはクローバーが「道徳の相対性（relativity of morals）」を論じ，いわゆる文化相対主義的な主張を述べているので，引用しておこう（Kroeber 1948 : 266）：

> The realization that every culture is more or less right in its ways when judged in terms of its own premises, and that no culture is provably more right than others in the abstract, was achieved by a much wider circle of minds than the scattering anthropologists of the later nineteenth century. But anthropologists, being in most continuous contact with a wide series of highly divergent cultures, were perhaps most consistently impressed, and they came to take the principle for granted as underlying their work.

クローバーは明記していないが，これがボアズの「文明相対主義」（沼崎 2013, 2014）を引き継ぐものであることは言うまでもなかろう。しかし，クローバーは，それゆえに個別文化の統合性と独自性を強調することはないし，個別文化の「純正性」を主張することもない。ルース・ベネディクトやエドワード・サピアとは対照的である。

3.　文明観

それでは，『改訂版』における文明観はどのようなものであろうか。繰り返すが，本書においても，文明は文化と同義的かつ互換的に使われていることは『初版』と変わらない。そのうえで，新しい主張がいくつか見られる。

第一に，「文明の豊かさ（richness of civilization）」という観点がある（Kroeber 1948：274）。クローバーは，古代エジプトおよびメソポタミア，中国と日本，メキシコとペルー，そして 1650 年以降の西洋文明において，社会の規模の拡大により，専門職の分化，技能の蓄積，新発明，文化内容の急増が見られると述べている（Kroeber 1948：273）。

第二に，文字記録の普及，人口の増加，大規模な都市化，機械産業化の進展という四つの要因の相乗効果で，「高度文明の一層の非人格化（growing impersonalization of higher civilization）」が進行するとクローバーは言う（Kroeber 1948：282）。

第三に，これは『初版』でも強調されていたことではあるが，「文明は，その蓄積的本性により前進する（civilization advances because it tends in its nature to be accumulative）」（Kroeber 1948：298）。そして，単に文化の蓄積が進むだけでなく，「呪術と『迷信』（magic and “superstition”）」からの解放，人体の生理学的あるいは解剖学的な側面に関する社会的関心の減衰と人命尊重の進展，そして合理的な科学技術の発展の三つのレベルで文明の「進歩（progress）」が客観的に測れるとクローバーは主張する（Kroeber 1948：298-304）。この点では，クローバーは師ボアズの進歩主義的文明観（沼崎 2013, 2014）を受け継いでいると言える。

第四に，個々の文明には，「その文化全体を特徴付ける型（total-culture patterns）」が見られ，「諸文明はその『形態』において異なる（Civilizations differ in “configuration”）」（Kroeber 1948：316）。そして，それぞれの文明には，物事の特定のやり方すなわち「様式（styles）」があり，「統治，戦争の遂行，産業や商業の運営，科学の振興，思弁的な論究についてさえも，様式を見出すことができる（We can speak of styles of governing, of waging war, of prosecuting industry or commerce, of promoting science, even of speculative reasoning）」（Kroeber 1948：329）[16]。

第五に，文明には，比較的平穏で安定した時期が長く続く一方で，発明や発見，天才の出現が集中する「絶頂期（climaxes）」が周期的ないし間歇的に訪れるという傾向が見られる（Kroeber 1948：326-328）。その結果，「人類文明の高度な価値は，急に爆発あるいは噴出する傾向が見られる（the higher values of human civilization tend to be produced in bursts or spurts of growth）」（Kroeber 1948：331）[17]。

---

[16] この点は，Kroeber（1973［1957］）でより詳しく論じられている。

[17] この問題を，様々な文化領域において世界史的に検討した大著が，Kroeber（1944）である。

これらの論点は，「超有機的」および「文明秩序の原理」でも論じられていたものであり，1910 年代以来の文明史的関心が 1948 年の『改訂版』にも継続していることが分る。

4.　まとめ

以上の検討から明らかなのは，クローバーの人類学観，文化観，文明観は，内容を深めつつも，基本的には 1910 年代から一貫しているということである。1948 年段階では，アメリカ人類学の傾向に合わせて，文明ではなく文化という語が多用されているが，文化と文明は歴史的にも地域的にも錯綜していて分かち難く，それゆえ二つの語は同義的かつ互換的に使われている。つまり，『初版』と変わらない。文化すなわち文明を「超個人的」で「超有機的」に捉えるという視点も変わっていない。いわゆる文化とパーソナリティ学派の興隆に触発されてか，文化の心理学的側面も論じられてはいるが，文化すなわち文明の説明と理解においては，生物学的あるいは心理学的還元主義は頑固に拒否されている。

したがって，文化のみが文明の理論的な説明要因であるという『初版』の主張は『改訂版』でも維持されている。タイラー，リントン，ローウィの文化の定義に共通する点としてクローバーが見出すのは，それが社会的に獲得され，社会的に継承されるという側面，すなわち「超有機的」であることだ。クローバーにおいては，「超有機的」と「文化的」は同義なのである。そして，文明とは，人種的・遺伝的なものでも個人的・心理的なものでもなく，超有機的すなわち文化的なものでしかありえない。そう考えるクローバーは，どこまでもボアズの忠実な弟子である。

大きく変化した点は，社会と文化の峻別であろう。これは，ハーバード大学の社会関係学科やイェール大学の人間関係研究所を中心に，社会学，心理学，人類学の分業と協力による総合的な社会科学が構想される時代に，晩年のクローバーも巻き込まれたことを意味すると思われる。しかし，紙幅の関係上これ以上この問題に検討を加える余地はない。稿を改めて論じたい。

お　わ　り　に

最後の単著となった『様式と文明』（Kroeber 1973［1957］）の結論部で，クローバーは「私は文明という語を文化という語とほとんど同義に使っている。少なくとも，区別

に重きを置いたことはない（I use the word civilization almost synonymously with the word culture.　At any rate I try to put no weight on a distinction）」と述べている（Kroeber 1973［1957］: 150）。

「様式（styles）」に着目することで，クローバーは諸文明の個性に接近していったのは確かである。しかしながら，彼の主要な関心は，一貫して人類の文明史に通底する変動と発展の型にあった。文化ないし文明の「混成性」や「雑種性」を強調し，個別文化の「統合性」ないし個別文明の「形態」の違いを認めながらも，人類史の総体を視野に入れ，その全体像を捉えることがクローバー人類学の目標であった。そのための概念が，「超個人的」で「超有機的」な文化ないし文明である。それは，個人に属することなく，社会の「上に浮かんで」おり，「文明秩序の原理」に従って，継続したり，移動したり，変容したりする。

また，クローバーは，いわゆる文化相対主義の思想を人類学的常識として共有してはいたが，ことさらに強調することはなかった。人種主義や社会ダーウィニズムに対する批判も，文化の相対性の視点からというよりは，歴史も地域も民族も越えた人類文化の一体性と不可分性の視点からなされていた感がある。

一体にして不可分の人類文化を総体的に捉えようとするために，クローバーは伝統的には歴史学の対象である諸文明をも考察の対象とした。また，ファッションの研究が示すように，近代文明，現代文明をも考察の対象としている。すなわち，自文化をも含めて，人類史を俯瞰しているのである。それゆえ，クローバーは文明という語を使い続けたのではないかと思われる。人類の所産の発展を総体的かつ動態的に捉えるには，単一文化（a culture）の個別性と定常性を含意する近代人類学的文化概念（Stocking 1968［1966］: 199-200）は適さないとクローバーは考えていたのではないか。そのような文化の用法が主流になればなるほど，差異化を図るために，クローバーは文明という語を使い続けたのではないか。

そうだとすると，「最初のボアズ派」であり，20 世紀前半を通してアメリカ人類学の中心的存在であったクローバーは，ストッキングの言う人文主義的文化概念から人類学的文化概念への転換（Stocking 1968［1966］）を終生果たさなかったと言えるのではないだろうか。

クローバーの文明史的関心は，ロバート・レッドフォード（Robert Redford）の文明へのアプローチ（Wilcox 2004）とも重なる可能性があるし，レズリー・A・ホワイト（Leslie

A. White）の文化進化論（White 1959）やジュリアン・スチュアート（Julian Steward）の文化変化論（Steward 1972［1955］）に受け継がれている可能性もある。そうなると，20 世紀アメリカ人類学において文明史が重要なジャンルとして長く持続したと言えるかもしれない[18]。その淵源をルイス・モルガン（Lewis Morgan）に代表される 19 世紀アメリカ民族学まで遡れるとしたら，アメリカ人類学の学説誌的系譜を書き換える必要もあるかもしれない。今後の研究課題としたい。

引　用　文　献

Goldenweiser, Alexander A.
1916　"Use Inheritance and Civilization." *American Anthropologist*, N.S. 18 : 292-294.
1922　*Early Civilization : An Introduction to Anthropology*. New York : Alfred A. Knopf.
1937　*Anthropology : An Introduction to Primitive Culture*. New York : F. S. Crofts & Co.

Jaknis, Ira.
2002　"The First Boasian : Alfred Kroeber and Franz Boas, 1896-1905."　*American Anthropologist*, N.S. 104 : 520-532.

Kroeber, A.L.
1916a　"Inheritance by Magic."　*American Anthropologist*, N.S. 18 : 19-40.
1916b　"Heredity without Magic."　*American Anthropologist*, N.S. 18 : 294-296.
1917　"The Superorganic."　*American Anthropologist*, N.S. 19 : 163-213.
1919　"On the Principle of Order in Civilization as Exemplified by Changes of Fashion."　*American Anthropologist*, N.S. 21 : 235-263.
1923　*Anthropology*.　New York : Harcourt, Brace and Company.
1944　*Configurations of Culture Growth*. Berkeley and Los Angeles : University of California Press.
1948　*Anthropology : Race, Language, Culture, Psychology, Prehistory*.　New York : Harcourt, Brace and Company.
1952　*The Nature of Culture*.　Chicago and London : The University of Chicago Press.
1959　"The History of the Personality of Anthropology."　*American Anthropologist*, N.S. 61 : 398-404.
1963a　*An Anthropologist Looks at History*.　Berkeley and Los Angeles : University of California Press.（松園万亀雄訳『文明の歴史像―人類学者の視点』社会思想社，1971 年。）
1963b　*Anthropology : Culture Patterns and Processes*.　San Diego, New York, London : Harcourt Brace Jovanovich, Publishers.
1973［1957］　*Style and Civilizations*.　Westport, CT : Greenwood Press.（堤彪・山本証訳『様式と文明』創文社，1983 年。）

Kroeber, A. L. and Kluckhohn, Clyde
1963［1952］　Ckuture : a Critical Review of Concepts and Definifions, New York : Vintage Books.

[18]　ラルフ・リントンの『文化の木』（Linton 1955）もまた，クローバー的な人類文化史である。

Kroeber, A. L. and Parsons, Talcott
1958 “The Concepts of Culture and of Social System.” *American Sociological Review*, 23 : 582-583.

Kroeber, Theodora
1970 *Alfred Kroeber : A Personal Configuration*. Berkeley, Los Angeles and London : University of California Press.

Linton, Ralph
1936 *The Study of Man : An Introduction*. New York : Appleton-Century-Crofts, Inc.
1955 *The Tree of Culture*. New York : Alfred A. Knopf.

Lowie, Robert H.
1920 *Primitive Society*. New York : Boni and Liveright Publishers.
1934 *An Introduction to Cultural Anthropology*. New York : Farrar & Rinehart, Inc.

松園万亀雄
1971 「解説―アルフレッド・クローバーの人と著作について」A・L・クローバー著『文明の歴史像―人類学者の視点』（松園万亀雄訳），社会思想社，273-289 頁。

沼崎一郎
2013 「フランツ・ボアズにおける「文化」概念の再検討（1）―『未開人の心性』1911 年版を中心に」『東北大学文学研究科研究年報』62 : 26-56.
2014 「フランツ・ボアズにおける「文化」概念の再検討（2）―『未開人の心性』1938 年版を中心に」『東北大学文学研究科研究年報』63 : 72-104.

Richardson, Jane and Krober, A.L.
1940 “Three Centuries of Women’s Dress Fashions : A Quantitative Analysis.” *Anthropological Records*, 5 : 111-154.

Sapir, Edward
1917 “Do We Need a’Superorganic’?” *American Anthropologist*, N.S. 19 : 441-447.

Steward, Julian H.
1962 “Alfred Kroeber, 1876-1960.” National Academy of Sciences. http://www.nasonline.org/publications/biographical-memoirs/memoir-pdfs/kroeber-alfred.pdf, 2013 年 10 月 7 日参照。
1972［1955］ Theory of Culture Change : The Methodology of Multilineal Evolution. Urbana and Chicago : University of Illinois Press.
1973 *Alfred Kroeber*. New York and London : Columbia University Press.

Stocking, George W., Jr.
1968［1966］ “Franz Boas and the Culture Concept in Historical Perspective.” Pp. 195-233 in *Race, Culture, and Evolution : Essays in the History of Anthropology*. New York : The Free Press.

Tylor, Edward Burnett

2010［1871］ *Primitive Culture : Researches into the Development of Mythology, Philosophy, Religion, Art, and Custom*. Volume 1. Cambridge : Cambridge University Press.

Wallis, Wilson D.
1926 *An Introduction to Anthropology*. New York and London : Harper & Brothers Publishers.

White, Leslie A.
1959 *The Evolution of Cluture : The Development of Civilization to the Fall of Rome.* New York : McGrow-Hill.

Wilcox, Clifford
2004 *Robert Redfield and the Development of American Anthropology*. Lanham, MD : Lexington Books.

Wissler, Clark
1923 *Man and Culture*. New York : Thomas Y. Crowell Company.
1929 *An Introduction to Social Anthropology*. New York : Henry Holt and Company.

“Culture” and “Civilization” in the Thought of Alfred Kroeber : Comparing the 1923 Version and the 1948 Version of His *Anthropology*

Ichiro NUMAZAKI

This paper examines Alfred Kroeber’s conception of “culture” and “civilization” by comparing the two versions of his classic textbook, *Anthropology*. The first version was published in 1923 and was widely used as a standard textbook in introductory anthropology courses at American universities. The thoroughly revised and enlarged edition of some 850 pages was published in 1948, just two years after his retirement from University of California, Berkeley, where he taught for nearly a half century.

In the 1923 edition, Kroeber uses “civilization” and “civilizations” more frequently than “culture” or “cultures” as he did in his classic 1917 paper, “The Superorganic,” and in his 1919 “On the Principle of Order in Civilization as Exemplified by Changes of Fashion,” which examined the long-term trend of stylistic changes in women’s dress. The term civilization is used more or less synonymously with the term culture. Kroeber does not define either of the terms but his usage suggests that civilization is conceived as something social or cultural, that is, superorganic and superindividual, irreducible to heredity or psychology of organic individual.

In the 1948 edition, Kroeber adds new chapters devoted to the nature of culture. He now uses the term culture more often than the term civilization, but he continues to use them synonymously and interchangeably. He also continues to characterize culture as something superorganic and superindividual, although he distinguishes the social from the cultural. His conception of civilization now focuses on patterns and styles that differentiate one civilization from another but his main concern remains in the discovery of generalized principle of civilizational processes throughout human history.

In short, Kroeber treated culture and civilization as synonyms throughout his long academic career and devoted himself to the discovery of the general patterns in the development of human culture or civilization as such. I therefore conclude that Kroeber did not fully achieve paradigmatic shift to the modern anthropological conception of culture. He may not be alone in this, for eminent anthropologists as Robert Redfield, Ralph Linton, Leslie A. White, and Julian H. Steward also concerned themselves with the question of the macro history of human culture or civilization.